

質問

張作霖爆殺事件の経過と河本大作の処分について
張作霖爆殺事件の経過と河本大作の処分について、
具体的に教えてください。

[回答者] 太田 聡一郎

はじめに

昭和三年（一九二八）に起こった謀略事件・張作霖爆殺事件は、戦後の極東国際軍事裁判（東京裁判）が昭和三（二十年（一九二八）四五）を対象としていることが象徴するように、昭和期の日本が大陸進出へ向かう端緒の一つとして一般的に理解されることが多い。事実この事件は、第一次世界大戦後の国際情勢の一つの帰結であり、その後の日本の対満政策に関する諸要素を準備する事件だった。以下、事件の起こった背景・事件当日の動き・処分への経過・その後の影響について、先行研究によりつつ解説していく。

一 張作霖爆殺事件の背景

清国滅亡後、辛亥革命によって一九一二年に成立した中華民

国は、第一次世界大戦以後に世界的に拡大した民族自決・反帝國主義の理念を掲げ、一九二〇年代半ば以降は蔣介石の率いる国民政府が政策を展開した。具体的には、列強が中国で獲得した権益を漸次回収するとともに、国民革命軍によって「軍閥」と呼ばれる地方実力者を制圧し中国全土の統一を目指す「北伐」を進めた。日本を含む列強は一九二〇年代初頭、中国での政治的・経済的協調を取り決めたワシントン体制を構築していたが、次第に列強同士の連携は乱れ、それぞれ中華民国との個別の対応を通じた国益維持・中国からの支持獲得を図るようになっていった。

一方日本は、二十一カ条の要求などを通じて権益を中華民国に認めさせようとするだけでなく、地方に勢力を持つ軍閥を支援する見返りに権益の保持・拡大を認めさせようとした。日本にとって特に重要なのは、主に満州など中国東北部に持つ日露戦争以来の権益維持だったが、そのために日本が協力相手として選んだのが中国東北部の軍閥・張作霖だった。張も日露戦争以来日本と結ぶことで勢力を拡大していた。

しかし、列強による北伐に対する数回の介入にもかかわらず、次第に国民政府の勢力が中国東北部に迫り、また張の一部政策が日本にとって不利益・不十分なものと評価されたことなどから、陸軍省・外務省内には次第に、張を排除し日本自らの手で

權益を保護しなければならないという危機感が生まれてくる。

しかし、昭和三年（一九二八）五月の済南事件で国民革命軍と日本軍が軍事衝突する事態に至っても、当時の田中義一首相兼外相（日露戦争時に張作霖を引き立てた張本人でもあった）はあくまで張を通じた權益維持を考えており、張への引退勧告という陸外両省の提案を拒否した。こうした張の扱いを巡る対立が同年五月末、国民革命軍が張を追って北京に入城するに至る中で、張の排除を求める非合法的な謀略へと発展することとなる。

二 事件当日の動き

北伐への抗戦を断念した張は、京奉線を用いて北京から奉天へ帰還することとなったが、事件はその途中で起きる。六月四日早朝、張の乗る特別列車は京奉線と満鉄本線が交差する皇姑屯という地点で爆破され、張は即死した。

事件を首謀したのは事件以前からさまざまな謀略に関与してきた関東軍司令部の高級参謀・河本大作だった。河本は五月末から準備に着手し、列車の情報収集・爆破実行・偽造工作などを複数のグループに担わせ謀略を主導した。河本が具体的に何を目指して事件を引き起こしたかははっきりしないが、日本の意に沿わない張を排除し、満州における日本の勢力拡大を狙っ

たと思われる。

事件直後は首謀者についてさまざまな風聞が飛んだが、総領事など満州情勢を知る現地の出先機関などは真相を察知していた。また、河本らの偽造工作も裏目に出た。河本らは雇った中国人を殺害して現場へ遺棄し、事件を国民革命軍の「便衣兵（ゲリラ）」の仕業に偽装することを狙っていた。しかし、雇った三人のうち一人が事前に逃亡し、中国側の尋問に対して現場の死体二人が自分とともに日本軍に雇われた者と証言したため、中国側は日本の犯行であると断定することとなった。真相を知った張作霖の息子・張学良は、七月以降国民政府との協調を進め、十二月二十九日に「易幟（国民政府の旗・青天白日滿地紅旗を掲げること）」を行って日本に対抗していくことを表明した。

三 事件処分の経過 真相発覚から田中内閣総辞職まで

事件が日本人の仕業であることは、事件直後から後藤新平や副総理格の政友会重鎮・小川平吉ら政治家が独自のルートを通じて把握しており、特に後藤は中国側の調査報告書まで入手していた。内密の調査のため派遣された峯幸松憲兵司令官は、事件が日本の謀略であり河本が主犯であることを突き止め、その後の報告会などを通じて真相は十月頃には中央政界にある程度

共有されていた。一方国民は真相を知らされず、一般には「満州某重大事件」という呼称で報道されていく。

真相を知る以前の事件直後から陸軍の仕業ではないかと疑っていた元老の西園寺公望は、事件を厳正に処分することによって軍紀の肅正と内閣の実行力を国内外へ示すべきとして、真相公表と犯人の厳しい処分を田中に強く要求した。野党・立憲民政党も国際関係に配慮し、議会での追及は警備不備に対する批判に留める自制を見せた。

張を通じた満州権益維持という自身の構想を挫かれた田中は当初、西園寺の指示通り真相公表と軍法会議開催による厳罰を決め、十二月二十四日には閣議にかけず天皇にも両項の内容を上奏した。しかし小川を中心に、国際的批判の激化を恐れる閣僚から反対の声が上がった。当初田中に同調していた白川義則陸相も、参謀総長や教育総監ら部内から一致した反対にあつて態度を変え、田中は板挟みに苦しむ。結局、翌昭和四年（一九二九）三月末の段階では、内閣と陸軍との間で、犯人は不明という虚偽の調査報告を公表し、警備の手落ちのみを問題として関係者を行政処分付すに留めるという方針が合意された。

以前から田中内閣に不信をいだいていた昭和天皇や牧野伸顕内大臣・鈴木貫太郎侍従長ら宮中側近は、田中の十二月の上奏時からの方針転換に反発し、上奏時に田中の食言の責任を問う

ことを計画するようになる。一方、西園寺は六月二十五日に牧野と面談した際、天皇の問責が内閣の進退に直接関与するのは前例のないことだと述べ、天皇に政治責任が生じることに危惧を抱く立場から反対した。六月二十七日、田中は虚偽の報告書公表や行政処分（関東軍司令官・村岡長太郎を予備役編入、河本を停職とする）の方針を上奏した。天皇は報告が以前のものと異なっていると指摘し、恐懼し弁解しようとする田中に対して説明は必要ないと拒絶することで、虚偽の報告書公表の許可を自身に求めることへ怒りを示した。この間のやり取りをめぐって、天皇の下問が問責・総辞職の要求を意図していたか、については議論があるが、この時点では西園寺の意を汲み、直接問責し総辞職を要求することは回避されたとする永井和氏の説が説得的である。

しかし上奏の後、天皇や牧野ら宮中側近は西園寺に相談することなく、陸相などを通じて天皇の真意は内閣不信任にあると田中へ伝えた。上奏時とはかく、ここに至って宮中側近が行政処分の承認と引き換えに総辞職を明確に求め、田中が天皇の信任を失ったと判断したことは確実だろう。田中は河本らの行政処分を待ち、七月二日に「満州問題に関連して輔弼の責任に顧み恐懼措く能わず」などとする辞表を提出、総辞職する。河本は停職した後、一年後に予備役に編入され現役を去った。

四 事件その後

事件以後張学良が国民政府と協同し、日本の満州への影響力拡大は失敗に終わった。しかし、満州權益を日本自らの実力で維持・拡大しなければならないという発想は関東軍を中心に残存し、約二年後の満州事変へつながっていく。また、宮中側近の画策で田中内閣が総辞職したという風聞が巷間に流布すると、田中内閣の与党だった政友会などは、宮中側近や重臣らが天皇の声を借りて不当に倒閣を行つたと攻撃するようになり、以降の「重臣ブロック」批判の一つの源流となった。

なお、張作霖爆殺事件はその後の昭和天皇にとって、自らの大きな転機となった事件として回想されることとなった。例えば昭和二十一年（一九四六）三～四月にかけ口述された『昭和天皇独白録』において昭和天皇は、事件に際し自分は田中の食言を責め辞表を出すよう迫つた（もつともこれは「ベトー（拒否権行使）」ではなく「忠告」のつもりだったと留保している）、しかし宮中側近の陰謀で田中内閣が倒れたという風評が広まってしまったため、自分はその後の内閣の上奏は自分が反対でも裁可することとした、と回想していた。

同様の記述は令和元年（二〇一九）にNHKが紹介した、初代宮内庁長官・田島道治の昭和天皇との対話記録『拝謁記』に

も見られる。昭和天皇はサンフランシスコ平和条約締結前後の昭和二十六～二十七年（一九五一～五二）に至っても「考へれば下克上を早く根絶しなかったからだ。田中内閣のときに張作霖爆死を嚴罰にすればよかったのだ」（張作霖事件の処罰を曖昧にした事が後年陸軍の紀綱のゆるむ始めになった。張作霖事件のさばき方が不徹底であつた事が今日の敗戦に至る禍根の抑々の発端）などという後悔を「御信念より相当繰り返し」語っていたという。

無論、これらの語りは自身の戦争責任を回避しようとする意図とも無関係ではないだろう。しかし、戦前日本の過誤を象徴する出来事の一つとして、戦後の昭和天皇に深く記憶されていたことは確かだと思われる。

参考文献・史料

寺崎英成、マリコ・テラサキ・ミラー編著『昭和天皇独白録

——寺崎英成・御用掛日記』（文藝春秋、一九九一年）

永井和「青年君主昭和天皇と元老西園寺」（京都大学学術出版社、二〇〇三年）

秦郁彦「張作霖爆殺事件の再考察」（『政経研究』第四四卷第一号、二〇〇七年）

石川禎浩『シリーズ中国近現代史③ 革命とナショナリズム

1935-45』（岩波書店、二〇一〇年）

家近亮子「北伐から張作霖爆殺事件へ」（筒井清忠編『昭和史

講義——最新研究で見る戦争への道』筑摩書房、二〇一五年）
 加藤陽子『増補版 天皇の歴史8 昭和天皇と戦争の世紀』（講
 談社、二〇一八年、初版は二〇一一年）
 NHK NEWS WEB「昭和天皇「拝謁記」 戦争への悔恨」
 ([https://www3.nhk.or.jp/news/special/emperor-showa/
 articles/diary-repentance-01.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/emperor-showa/articles/diary-repentance-01.html)) 二〇一九年十二月十九日
 最終閲覧。
 （おおた・そういちろう／東京大学大学院人文社会科学系研究科修士課程）

日本史 図版・史料 読みとり問題集

菅野祐孝 著

図版・史料問題に特化した問題集。2部構成で、
 第1部にはウォーミングアップとして大学入学共
 通テストに向けた問題を実戦模試として配し、第
 2部の図版・史料問題では、教科書に登場する主
 要な図版について、何を押さえばいいのかを2
 択の問題形式で示した。解説文を完成させながら
 全体像が把握できるように、原始・古代～現代ま
 でを58問にまとめ、教科書学習を補うワークブ
 ックとしても活用できる。

B5判 本体900円(税別) 132頁＋解答32頁
 ISBN：978-4-634-01206-6

大学入学共通テスト・
 国公立2次・私立大対応

日本史 図版・史料 読みとり 問題集

菅野祐孝

1部 大学入学共通テスト実戦模試に挑戦
 2部 通史を58テーマに分けて2択問題で
 解き進め、図版のポイントを抑える

教科書に登場する
 主要な図版・史料
 約160点を掲載

図版は、“見る”から
 “読む”へ——菅野祐孝

山川出版社